

〔目的〕我国における伝統的な和服も、時代の流れとともに生活様式の洋風化などの影響により、日常着としての和服は次第にその存在価値のうすれていく現状である。そこで和洋服の比較検討の立場から季節による着用の快適さについて、夏期の高温高湿下・冬期の厳寒時における皮膚温分布および活動面からみた歩行動作の相違について着用実験を行ない、衛生学的立場から解析を試みたのでその成果を報告する。

〔方法〕①実験試料 浴衣地・ワール着尺地でワンピース・単衣長着を作製。②被験者 成人女子5名。③実験項目と方法 皮膚温分布 — サーミスタ温度計・サーモビューアによる各部皮膚温（環境条件 30°C ・ 20°C ）、歩行動作 — 筋電計による歩行時における足さばきの筋負担。（大腿直筋・前脛骨筋・長腓骨筋）

〔結果〕①皮膚温分布 1. 夏期実験 被覆面積小の洋服の皮膚温は低く、和服よりはるかに快適である。和服は帯による皮膚温上昇が著しく、特に胸部・腹部において顕著な差がみられる。2. 冬期実験 和服は被覆面積大で打合わせ・縫いしろ・お端折などの布の重なりも多いため保温効果に優れている。一方洋服は被覆面積小で重なり・縫いしろが少ないため衣服表面からの放熱も著しく、下肢・背面の皮膚温低下が顕著にみられる。②歩行動作に関する実験 和服・洋服を比較すると、和服着用時における歩行動作の足さばきは困難であり疲労も大きい。筋への負担は洋服着用時の4倍以上の負担がかかり激しく活動していることが認められた。その結果和服は歩行動作の上からも非活動的なものといえる。